白川静のことば《43》

金子都美絵・画

徳がもし神によって与えられるものであるならば、「道を失ひてしかるのちに徳あり」という［老子］の語は、明らかに誤りであり、あるいはパラドックスである。本来、道は失われるものではない。失われるものは、道ではありえないからである。文字の起原的な意味からいえば、徳とは道を見ること、それを神と同じ次元において見ることを意味した。すなわち神徳である。徳の字形のうち、心は最後に加えられた部分である。その初文は、道を示す彳と、呪飾を施した呪眼より成る。呪飾や仮面は、いうまでもなく神と同位化するためのものである。眼に呪飾を加えて巡行することを、古くは省道といった。斬首祭鼻の頭を携えて道を行くのも、眼に呪飾を施して厭伏を加えながら行くのも、同じく神の次元においてことを行うためである。

徳はこの省の字形に心をそえた形である。それで遡っていえば、省は徳の初文であるといえよう。神とともに、神の道を巡省することが、徳の字形の示す原意であった。

（『文字逍遥』平凡社ライブラリー p95～97）